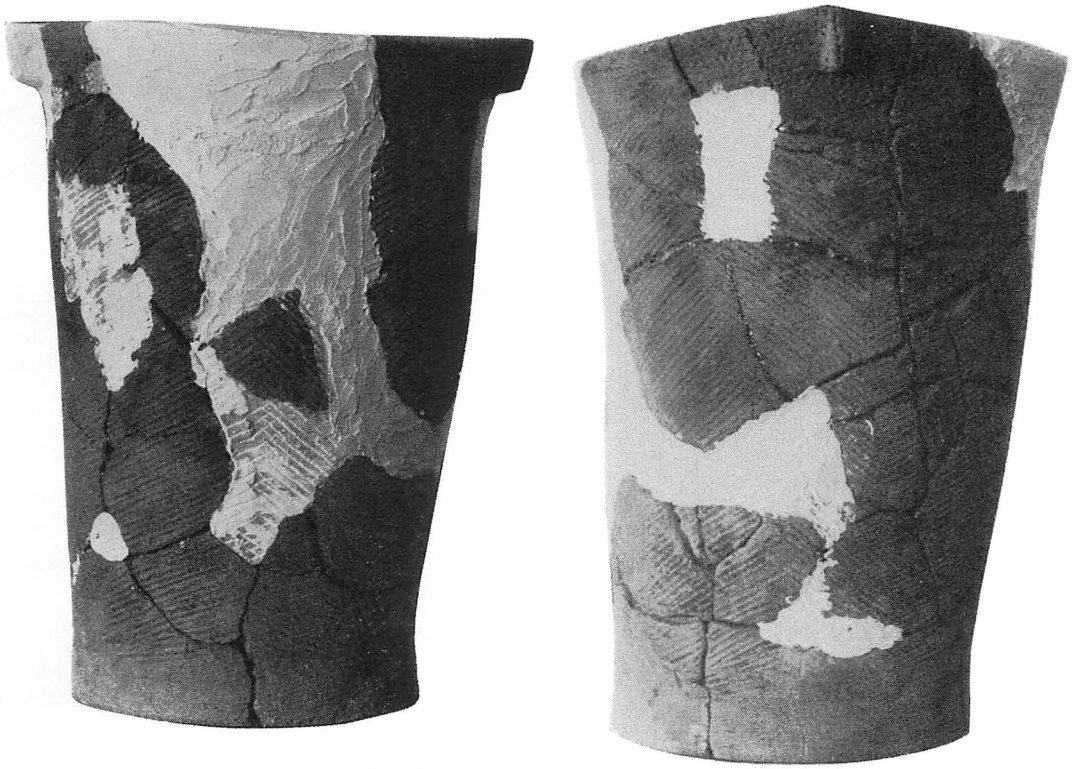
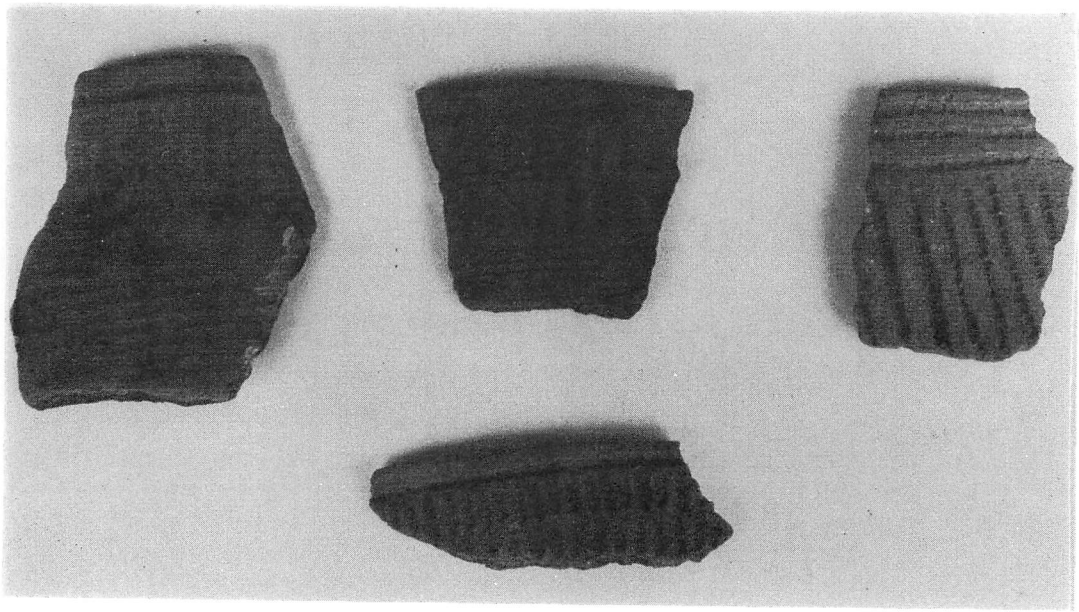
図版第Ⅰ　熊本県塚原遺跡出土円筒土器（絡縄帯圧痕文）

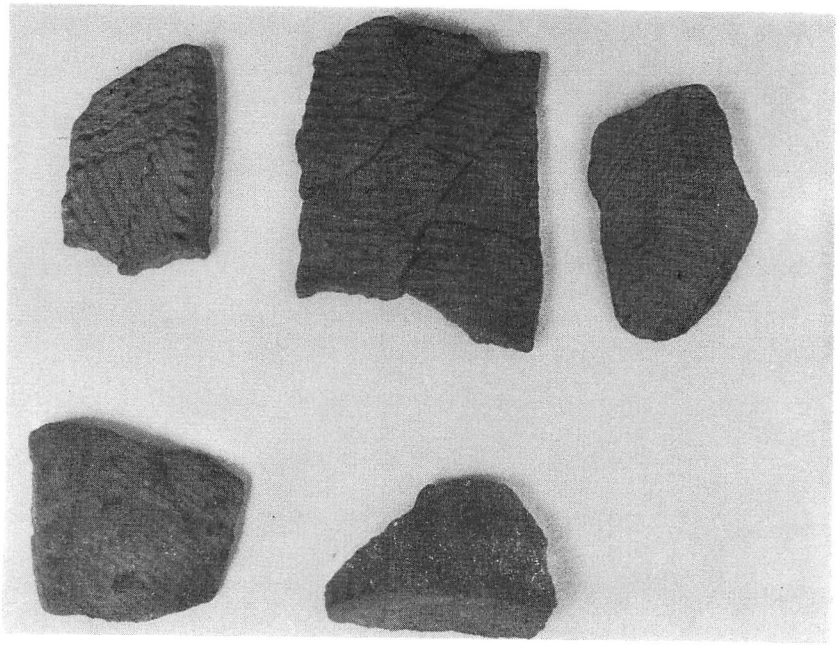
図版第Ⅱ　熊本県諏訪原遺跡の円筒形土器（撚糸文）



石　坂　式　土　器　（左正面、右側面より）



図版第Ⅲ　吉田式土器　（貝殻条痕文、押引き文、圧痕文）



図版第Ⅳ　前平式土器（貝殻条痕文、下　角筒）

図版第Ⅴ　宮崎県　五十市遺跡　円筒土器（縄文）

九州の円筒土器

賀　川　光　夫

（Ⅰ）

九州地方の縄文文化の研究は、その土器に関する限ぎり、いまだに全体を精察するまでにはいたっていない。1954年から数度の発掘がおこなわれた早水台遺跡（八幡、賀川他、1955. 1965）は、その後の関連遺跡の調査を含めて、縄文早期押捺文土器の大系を把握できるところまでになった。また1961年から発掘を開始した福井洞穴（鎌木、芹沢、1966）では、細石器と土器の共伴をみて、隆帯文や爪形文土器の開始期を想定せしめた。この研究は、泉福寺洞穴（麻生他、1975.1976）の豆粒文の発見で、その上限に達したとみてよい。

最近の縄文文化研究の一つの課題として、朝鮮半島との対比が問題である。つまり文様として細線刻文を施し、胎土に滑石を多量に含む曽畑式土器と、韓国の南部東三洞出土の幾何学文土器（櫛文土器）を軸とした先史土器の関係追求である。東三洞遺跡の発掘は、縄文各期の土器文化との交流をも指示し今後に大きな問題を残こしている。この曽畑式土器については、その分布が、西九州を南に走り、薩南諸島に及ぶことの推理はある程度おこなわれていたが、最近沖縄本島（高宮他、1975. 1976）において爪形文土器を下層に多量の曽畑式土器が発見された。後氷期以降の海退現象が残る時期の所産とする考えもあるが、その議論は別に、科学的に追求しなければならない問題である。

大陸や半島との関係として検討しなければならぬ問題として、縄文農耕論に関係し、後晩期の土器がある。黒色磨研土器（賀川、1969）の発達とその編年については、関連する石器などの研究とともに精査が進められ、大石遺跡の発掘からその大要を把握できる段階となった。しかし一部には黒色磨研土器の取り扱いについていまだに問題があることは事実で、今後の研究に俟たなければならない。

昭和後半のこうした研究は、部分的に大きな成果をあげてきた。しかし全体としてみると処理しなければならない問題が数多くあることに気付く。例えば九州独特の中期土器として阿高式土器の存在をどのように考えるか。分布範囲がその濃度において西九州を出ない独自の存在をどのように考え、それに対応する他の土器文化の性格などは全くわかっていないのである。このこと自体、九州の縄文中期文化はいまだに空白であって、小林久雄氏の昭和前半の研究を大きくでていないのである。黒色磨研土器と農耕の関係においても、坪井清足氏の御領式土器（坪井、1967）の研究を軸に展開されたに過ぎず、例え数形式の土器編年ができたとしても、問題はこれからだとする考えに立たねばならぬであろう。そうゆうなかで、ユニークな問題が一つある。それは河口貞徳氏の発表になる薩摩半島を中心として発見された円筒土器（河口、1953. 1655）の問題である。円筒土器は、土器製作過程で、その進歩した技術の輪積法による形成技術で、土器発達上経過しなければならぬ技術である。したがって河口氏の提言は、九州の縄文文化の汎日本的特徴の存在を指示したものである。

（Ⅱ）

河口貞徳氏は器面に貝殻文を施す円筒土器を鹿児島県を中心に報告された。そして、その時期を早期末から前期初頭に位置ずけ、角筒の存在を含めて興味深い問題を提起された。この提言は、九州において所謂「円筒土器」の最初の考察として学史的な発言である。この発表についで、貝殻文施文の南九州独特の円筒土器はその後鹿児島県から隣接の熊本、宮崎の一部にも出土例がみられるようになり、分布が次第に広範囲になるにつれて、内容にも変化をみるようになった。

1970年頃までに、高木正文氏は、熊本県から長崎県の南部島原半島にかけて、円筒土器の出土遺跡を踏破し、ここに西九州における円筒土器の分布、特徴を研究した。そして、円筒土器の出現が押捺文土器の終末と無縁でないと考えられるいくつかの問題をいだくに至った。早期土器の形成技術には幾多の議論があるが、全体としては巻上げ技法に終始するとと考えられている。より輪積的技法は円筒形に整形する方法において顕著にあらわされるのである。輪積的技法を早期土器にみることはまだ問題があるので、円筒土器を早期押捺文土器からの関係にあてることの厳密な議論は今後の研究としておきたい。

さて、近年鹿児島県では、円筒土器を出土する遺跡の発掘が目立つ。その第一にあげねばならぬのが加栗山遺跡である。この遺跡は、円筒土器を含めた遺物を包含する住居地帯で調査にあたった青崎和憲氏はその層序的観察を可能にした。円筒土器を発見する各所で、その層位的判断を科学的に実施する法として、パミスを含む赤土のC^{14}検査によるデーターがある。且て河口貞徳氏によって窓を開かれた塞神式土器を含めて、鹿児島県の円筒土器は、おおかた、この赤土の下に集中するのである。赤土のC^{14}はおよそ6000年B.Pの数値であるから、その下層より出土する円筒土器は年代的には早期から前期前半と判断できよう。こうした層位的研究のあり方はその精度ある発掘方法によって達成されるものであって、こうした研究を進めた結果の成果であった。加栗山を含めたこうした問題の成果はいずれ鹿児島県から詳報がなるものと考える。南九州では、河口氏の研究の後継者の一人としてとして弥栄久志氏が、その後の円筒土器の分布とその性格について起稿された。

宮崎県五十市発見の円筒土器は、西南九州のそれとは異なり、器面に縄文を斜行させるものである。この特異な斜縄文を施文する円筒土器は、東からの影響と考えることができるが、いまだその資料が少く今後に期待しなければならぬ。全体として貝殻文土器を施す円筒土器文化の中にあってこの目新らしい斜縄文の土器は、一つの課題である。資料として野間重孝氏の投稿を得た。

九州の円筒土器は以上の如く、九州南部を中心に濃密に分布することが明らかとなり、その範囲の拡大は明らかで、北部九州のこの種土器の検討が待たれるところである。

（Ⅲ）

九州の円筒土器が河口貞徳氏によって提言されてから、その異様な土器形式に魅了されたのは一人筆者だけではなかろう。縄文の研究者は誰れしもこの貝殻文の美しい文様と器形にひかれることであった。1962年に都城市五十市の道路工事で発見された円筒土器は、2段撚りの斜縄文土器であった。一見勝坂式の縄文軌跡の特徴をもった大粒の縄文の目は、明らかに東から影響であると推理

されたが、この発見で、九州の円筒土器の複雑さが更に注目された。貝殻文、その押引文様構成は特異なものであった。加えて、本格的縄文技法をもつ円筒土器は、興味深いものであったが、ここでは層位的検討を充分加えることができる状態での出土であった。後年鹿児島でおこなわれた科学的検討の対照として、パミスを含む赤土の下部からの発見であって、その層位的な観察にかなりの注意をはらったものである。こうして、五十市の土器は、南九州の「円筒土器」出現の実感を筆者にあたえてくれた。この頃から、九州の円筒土器についての研究を心がけ、幸いにして多くの協力者ができたのである。熊本県における円筒土器の発見と分布は更に筆者を驚かせた。貝殻条痕文、撚糸文、縄文と、南九州とは別の施文法によって整形され、それが一部に塞神式土器と共伴しながら広範囲に普遍する事実が明らかとなった。この西九州での円筒土器は、当然北九州全域にわたって分布するものと考えられる。

南九州の貝殻文、東南部九州の斜縄文、西九州の縄文、撚糸文と施文技術を異にし、形態的にもバリエーションがある。これらの円筒土器は、東北日本にみる所謂円筒土器の統一的な形態と趣を異にする。しかし、今日までの調査から、「九州の円筒土器」として、東北日本のそれと対比して、縄文早期前期の特徴を明確に位置ずけることが可能になったということができる。

九州はまだまだ縄文文化を全体として大系ずけるまでには至らない。ということは、これほどまとまりのある円筒土器についても、いまだにすべてを網羅し、その内容に深く立ちいることができない状態であることをみても明らかである。しかし、この円筒土器が、寺師見国、河口貞徳両氏の指適から、今日の研究の端を発し、北九州を除いて、可成り精細な考察を加え、その背景の文化にせまろうとしていることは一つの成果である。しかし、絶対年代をはじめとする層位的観察、他地域との関係など、今後に残された問題が山積しているところをみると、九州の円筒土器は、ようやくにしてその姿体の全容を撮影できたに過ぎないのである。

本橋は、高木正文、弥栄久志、野間重好の諸氏のこれまでの研究を総合して「九州の円筒土器」を編集した。内容についての御批判と御鞭撻をいたゞき、更に内容の充実に御協力を願い度い所存である。

1955　八幡一郎、賀川光夫　「早水台」　大分県文化財調査報告　3

1965　八幡一郎他　「続早水台」　大分県文化財調査報告　9

1966　福井洞穴調査報告　図録篇　長崎県文化財調査報告書第4集

1976　高宮広衛、知念勇、曽畑式、轟式及び爪形文土器　考古学協会　熊本大会研究発表

1975　高宮広衛、知念勇、上地正勝　沖縄県続谷村字渡具知東原発見の土器、考古学ジャーナル115号

1975　麻生優　白石浩之　泉福寺洞穴の第6次調査　考古学ジャーナル116号

1976　麻生優　白石浩之　泉福寺洞穴の第7次調査　考古学ジャーナル130号

1969　賀川光夫　縄文文化「九州晩期」　考古学講座　3　創元社

1967　坪井清足　熊本県御領貝塚　石器時代　8　石器時代文化研究会

1953　河口貞徳　石坂上遺跡　日本考古学年報　日本考古学協会

1955　河口貞徳　南九州出土の条痕土器　石器時代1　石器時代文化研究会